

実用英語技能検定試験受験者の推移と現状

—秋田高専における実践より—

桑本裕二・菅原隆行・海上順代

Progress and the Current State of Applicants for the STEP Test : A Case Study at Akita National College of Technology

Yuji KUWAMOTO, Takayuki SUGAWARA and Nobuyo UNAGAMI

(2004年11月30日受理)

This paper reports a case study on the STEP (The Society for Testing English Proficiency, inc.) Test at Akita National College of Technology. As we have introduced the STEP Test into our English education since 2001, we can show how the number of applicants for the test has increased and how many students have got the appropriate grade for three years. As the number of sophomores challenging the pre-2nd grade has increased, the pass rate of the grade has become higher than that before 2000. As for the 2nd grade, more and more students including lower year students have been getting it. As a whole, students' willingness to take the test and to get appropriate grade is being activated year by year. The effect of this tendency could also contribute to the educational program for the TOEIC Test, which is another strategy of English education at our college.

1. はじめに

秋田高専の英語教育においては、これまで文部科学省認定実用英語技能検定試験（以下、英検）の受験・取得を学生に奨励し、それを効果的に教育に反映させてきた。特に、2001年度からは2年次学生に英検準2級¹の受験を義務づけ、それに応ずるものとして2年次に行う英語の授業に英検対策を盛り込んでいる。これは、3年次で実施しているTOEIC受験の準備として英語の基礎力を2年次修了までに養うことを目的としているが、同じく2001年度に始めた3年次学生を中心としたTOEIC IPテスト実施とその成果に効果的な役割を果たしてきた。

2年次での英検準2級受験・取得の奨励に先立ち、1年次においては英検3級の取得を奨励している。英検3級は、中学卒業程度の能力を前提としており、1年次学生が本校入学前に既に取得している場合も含めて、最低限1年次修了までに在籍学生全員の英

検3級取得を要求している。これに加えて、余力のある1年次の学生に対しては、2年次で取得することになる英検準2級の受験も奨励している。

3年次学生に対しては、TOEIC IPテストを実施し、授業もTOEIC対策を中心に行っているため、英検の受験は積極的には奨励していないが、2年次修了までに準2級を取得できなかった学生に対しては、基礎力を追跡的に向上させるという目的で受験を促している。この準2級の取得については、4、5年次学生の状況も把握することで、本校学生の基礎的な英語力が卒業時まで一体どの程度向上するかを知ることができる。

2級、準1級に関しては、受験・取得の奨励は全体的に行っていないが、意欲的な学生、または英語力の優れた学生に対しては受験を促し、その結果として徐々に受験者、合格者を増加させる結果となった。

また、TOEIC IPテストの結果と、英検の取得状況との間に興味深い相関関係が見られ、TOEIC受験対策を主要な取り組みとしてかかげる秋田高専の英語教育にあっても、英検対策の重点化はその一翼

¹ 英検には、2004年現在、1, 準1, 2, 準2, 3, 4, 5の7つの級が制定されている。準2級は高校2年程度のレベルとされる。

を担っていると考えられる。

本論は、秋田高専における英検受験・取得の状況について、特に英検受験を重点化した2001年度から2003年度までの3年間を中心に、英検受験者・合格者がどのように推移してきたのか、また、現状における問題点は何なのかについて報告するものである。以下の各節において、学年と受験級によっておおまかに分類し、傾向について詳述する。2節で、1年次学生と3級取得について、3節で2年次学生に対する準2級取得について、4節で3年次以降の準2級取得状況、5節で2級および準1級の受験・取得状況について、6節で英検受験とTOEIC受験の相関関係について述べ、7節で全体をまとめる。

2. 1年次学生に対する英検3級奨励と実績

秋田高専では、1年次学生に対し、学年終了までに英検3級を必ず取得するように指導している。これは、英検重点化の2001年度以前から行ってきたことだが、特に重点化後は、2年次での準2級取得への挑戦の準備としての意味合いが強まった。

英検3級は中学卒業レベルの英語力を要求するものであり（鳥飼（2002：63）など）、入学前に既に3級を取得している学生も多くいる。表1. は、入学時における3級取得者を表したものである。

表1. 入学時における3級取得者数の推移

年 度	2001	2002	2003	2004
在籍者数	177	169	164	178
取得者数	49	52	37	41
取得率(%)	27.7	30.8	22.6	23.0

※準2級取得者も含む（2003年度2名、2004年度1名）

入学年度により若干の差はみられるものの毎年20%台位は常に取得済みということになる。

表2. は実際の1年次学生に対する3級受験の実績である。

表2. 第1学年における英検3級取得状況

年 度	2001	2002	2003
在籍人数	177	169	164
取 得 者	170	160	143
未取得者数	7	9	21
取得率 (%)	96.0	94.7	87.2

1年次修了までに3級を取得した者の実質的な取得率は80%から90%以上の高い割合を示す。ここ3

ヶ年では、2001年度の96.0%から2002年度の94.7%、2003年度の87.2%へと徐々に低下していることがわかる。未修得者数も7人から21人とかなり増加してきてしまっている。2003年度の1年次学生の未取得者数が21人であるが、この数字は少ないものとはいえない。複数回受験者もかなり含まれるからである。不合格者の得点も「不合格 B²」以下の低い評価になる学生もいた。表3. は2003年度の各回の不合格者の内訳である（データは一次試験の結果）。

表3. 2003年度の英検3級一次不合格者

	第1回	第2回	第3回	合 計
不合格 A	6	9	0	15
不合格 B	3	4	2	9
不合格 C	0	3	3	6
合 計	9	16	5	30

※ 太字は2年次学生1名を含む

逆に、一度又は二度「不合格」の評価を受けると受験をする意欲がなくなり、英語に対する苦手意識が強まる学生も見られた。しかし第3回目まで諦めずに受験し続けた学生の多くは、合格点に達する者がほとんどであった。そのような結果を考えると、英検を奨励する意味はあると思われる。

2004年度の第2回の一次の3級受験者の合否の結果を見てみると、2003年度より不合格率が下がっている傾向が分かる。

表4. 2003/2004年度の3級一次不合格者比較

年度-回	03-1	03-2	03-3	04-1	04-2
受験者数	73	43	18	1	73
合 格 者	64	27	13	1	68
不合格 A	6	9	0	0	3
不合格 B	3	4	2	0	2
不合格 C	0	3	3	0	0
不合格計	9	16	5	0	5
不合格率(%)	12.3	37.2	27.8	0.0	6.8

※一次免除者を除く

2004年度の第2回では73名の3級受験者の内、不合格者数はわずか5名であり、「不合格 A」が3名「不合格 B」は2名で「不合格 C」に該当する学生は0名であった。2003年度と比較すると、不合格者のべ人数は格段に下がった。また2004年度は、2

² 英検の不合格の評価は、その程度によりA~Cに分けられて通達される。

回目一次試験終了時点で、まだ「不合格C」の受験者は出ていない。この傾向は、表2. で示された1年次3級取得率の低下が上昇に向かう兆しと考えられ、2004年度の結果が期待される。

3. 2年次学生に対する英検準2級奨励と実績

2001年度より秋田高専2年次学生に対しては、英検準2級の取得を義務づけ、以降各年度の4月～9月の前期の期間に英検対策の問題集を演習形式で行ってきた。表5. は、2001年度と、これに先立つ2年度分の、全学年における英検準2級受験者と合格者の推移を示したものである。

表5. 英検準2級受験者・合格者の推移

年 度	1999	2000	2001
受験者数	77	98	275
合格者数	17	31	124
合格率(%)	22.1	31.6	45.1

受験者数が2001年度において格段に増加したことは2年次における英検準2級対策授業の導入による当然の結果といえようが、同様に合格者、合格率ともに増大したことは、この重点化が効果を十分に発揮したことを示している(小嶋他(2002:39))。

その他の級(3級・2級)との合格者の推移を比較しても準2級に対する重点化が顕著に伺える(表6. 小嶋他(2002:11)より)。

表6. 英検合格者の推移(各級ごと)

年 度	1999	2000	2001
3 級	97	113	122
準2級	17	31	124
2 級	7	5	4

重点化を行った当該学年である2年次学生のみに注目してみると、表7. のとおりとなる。参考として重点化導入前の2000年度2年次学生のデータも加える。

表7. 2年次学生の年度別準2級実績

年 度	2000	2001	2002	2003
在籍者数 ³	(29)	159	174	162
合格者実数	11	112	97	57
合格率(%)	38.0	70.4	55.7	35.2

※()は受験者数

2000年度は2年次学生に対する準2級受験を義務づけていなかったため、受験者に対しての合格率を示した。2001年度以降は、受験を義務づけた(3度の受験機会のうち必ず1度は受験するように学生に通達していた)ため、受験者実数はほぼ在籍者数に一致する。重点化導入前の2000年度と、導入初年度の2001年度を比較すると、受験者は5倍以上、合格者実数に関して約10倍という伸びを見せている。合格率については、38.0%から70.4%へ、2倍近く伸びている。2000年度(ひいてはそれ以前)は、準2級受験を希望する学生は、大半は英語力に自信があるか少なくとも意欲的に取り組んでいることが予想され、合格率は高いものであったと期待されるが、意に反し、強制力を持たせた2001年度の方が、受験者数の増加はさておき、合格者、合格率が共に格段に増加していることは、注目に値することである。つまり、英検準2級受験の奨励が、効果的に作用した結果と考えられる。

次に、2001年度以降3ヶ年の実績をたどると、合格率について、70.4%(2001年度)、55.7%(2002年度)、35.2%(2003年度)と、年を追って徐々に下がっている。これらの3年間で、秋田高専への入学者の学力が比例的に低下してきたという指摘もあるが、2004年度の実績を確認した上で今後これに対する対策を考えていかなければならないと思われる。

次の表8. は、2年次進級時までに準2級を取得した学生数の年次比較である。

表8. 2年次進級前の準2級取得者数の推移

年 度	2001	2002	2003	2004
在籍者数	159	174	162	169
取得者数	15	15	6	14
取得率(%)	9.4	8.6	3.7	8.3

2003年度で極端に落ち込んだものの、一定して十数名の学生が1年次修了までに準2級を取得していることになり、取得率も10%に近い値を示している。このことは、成績上位の学生が毎年一定の人数存在していることを示す。この表8. から示される示される結果と、表7. にみる、年を追っての合格者数の減少傾向と相関させると、学力中～低程度の学生に対する学力向上へ向けての対策が必要となろう。また2004年度の2年次学生が最終的にどのくらい準2級を取得するかは年度途中であるため結果がまだ出ないが、表8. における2003年度から2004年度に

³ 年度中途退学者、休学者を除く。

かけて取得率の急激な上昇に注目するならば、2004年度の取得率は十分期待できる。

4. 3年次以降の英検準2級取得の奨励と実績

2年次学生に対して2001年度より実施してきた英検準2級取得の奨励、および授業での対策は、3年次学生に対して、同じく2001年度より行っているTOEIC受験に際して、基礎となる英語力を確実なものにしておくためであり、2年次修了までに本校在籍学生全員に英検準2級を取得させるというのは、TOEIC受験対策を効果的に行うための努力目標でもある。前節表7. でみるようにその合格率は、重点化初年度で70.4%、以降、55.7%（2002年度）、35.2%（2003年度）と徐々に下がり、100%にはほど遠い割合であったが、2年次修了時まで英検準2級に合格できなかった学生に対しては、それ以降も合格を目指して、追跡的に受験を奨励した。ただし、3年次では、TOEIC受験を第一の目標としていることもあり、また、在籍学生全員がその対象者ではないため、3年次開講の英語の授業ではあえてその内容を行わなかった。

英検準2級対策を2年次において行った学生についての、3年次以降における英検準2級取得状況は次の表9. が示すとおりである。

表9. 3年次以降の準2級取得状況

	2002年度 3年次	2003年度 4年次	2003年度 3年次
在籍者数	148	138	172
前年未取得者数	40	21	73
合格者数	12	3*	7
未取得者数	28	18	66
未取得率(%)	18.9	13.0	38.4

※ * 2級取得者1名も含む

3列中、左の2列は同一母集団の3年次から4年次への推移を示している。2002年度当初に40名であった未取得者が、2年経て、2003年度末には18名にまで減り、結果的に当該学年における準2級未取得者は4年次修了時点で13.0%にまで減った。2003年度3年次は1ヶ年分の結果しか出ていないが、全学年の実績を大きく下回ってしまっているため今後も追跡的に受験を奨励していかなければならない。

5. 英検2級・準1級の取得状況

英検2級以上に関しては、英語教科の必修科目での対応や、進学へ向けての積極的な対策としては特に考慮していない。授業としては、5年次開講の選択科目（前期週2時間、1単位、担当：海上）で英検2級対策の問題集を教材として使用している。また、校外学修の単位として英検2級に対して2単位、英検準1級に対して4単位を認めており、4、5年次の高学年学生に向けて受験を促してきている。

5.1 英検2級取得に関するデータ

英検2級は高校卒業程度の英語力を要求しており、大学入試程度の文法力・作文力が必要とされる（鳥飼（2002：63））。高専においては、通常の大学入試の受験の機会はほとんどなく、学生は大学入試のための受験勉強を経ないで高学年へと進級する。そのため、高専4、5年次学生は、同等年齢の大学・短大1、2年生に比べると一般的に英語力は格段に低いとされる。高専卒業生の昨今の傾向としては、大学3年次編入学を中心に、上級学校への進学希望が増加の一途をたどり、秋田高専では現在は卒業生の約半数が進学している。一般企業への就職に関しても、TOEICの点数に興味を持つ企業が増えるなど、英語力の必要性が叫ばれている現状である。こういった状況の下で、特に4、5年次学生に対して、最低限の英語力の証として英検2級取得を望み、受験を奨励してきた。

表10. は、ここ5年間の英検2級受験者、および合格者の推移である。

表10. 英検2級受験者・合格者の推移

年度	2000	2001	2002	2003	2004
受験者	25	40	53	109	50
合格者	5	4	3	10	1

※2004年度は第2回1次試験終了時

第2学年に英検準2級取得を義務づけたのを中心に英検に対して重点化をはかった2001年度を境に受験者数が目立って増加したことがわかる。2000年度から2001年度にかけてほぼ倍増、2003年度にはのべ109名の受験者をみた。合格者数は2003年度には10名の合格者を出し、今後もこの傾向に刺激されて受験者・合格者共に増加していくものと期待される。

次の表11. は、学年別受験者の推移である。

表11. 英検 2 級学年別受験者の推移

学年	1	2	3	4	5	専	合計
2000	3	0	3	11	6	2	25
2001	4	9	15	3	7	2	40
2002	4	17	14	15	0	3	53
2003	1	11	15	77	5	0	109
2004	0	5	8	16	21	0	50

※専=専攻科
 ※2004年度は第 2 回まで

受験者の中心となっているのは 3 年生以上であるが、1, 2 年生の受験者も少なからずいて、低学年の中に英語の学力向上に意欲的な学生が多くいることがわかる。合格者に関しては、表12. にみるとおりで、第 2 学年では2001年以降毎年合格者を出している。

表12. 英検 2 級学年別合格者の推移

学年	1	2	3	4	5	専	合計
2000	0	0	2	1	2	0	5
2001	0	1	2	0	1	0	4
2002	0	1	1	0	0	1	3
2003	0	2	2	6	0	0	10
2004	0	0	0	0	1	0	1

※2004年度は第 1 回まで

表12. の中で、2003年度 4 年次学生 6 名、というのが際だっている。同一学年でこれほどの合格者を出したことも画期的だが、年をさかのぼると、2001年度の重点化初年度に英検準 2 級取得を義務づけられた第 2 学年の学生であり、重点化によって活気づけられたことがその後も継続し、よい結果をもたらしたものと考えられる。受験者も、当該年度第 4 学年は77名であり、単年度での全受験者ですら過去10年さかのぼっても多くて30名程度であったことを考えても⁴、英検重点化の効果は十分にあったと考えることができる。

5.2 英検準 1 級受験者への対応

英検準 1 級は、2 級の一つ上の級であり、「一般的な話題なら十分に理解できるくらいのレベルで、大学 2 年修了程度（鳥飼（2002：62）」とされている。一応の目安となる学年が設定されてはいるが、筆者はもはや修学年限に関わらない英語力が要求されているといった感を受ける。秋田高専においては、在籍学生の基礎的な学力から考えて、この級の受験・取得の奨励は多くの在籍学生に対しては望ましいも

のではない。これまでの英検準 1 級受験者の推移は表13. の示すとおりである。

表13. 英検準 1 級受験者の推移

学年	3	4	5	専	合計
2000	0	0	2	0	2
2001	0	0	0	3	3
2002	0	0	0	2	2
2003	0	2	1	3	6

※太字は合格者

受験者は、実際には同一学生が複数回受験しているものがほとんどなので、実質毎年 1 人いるかどうかという状況である。合格者は表13. の中では 1 名のみ⁵、1990年度以降では、1990年度の 1 名がこれに加わるのみである。現状では合格者はほとんど期待できないが、今後 2 級への取り組みがより活性化されてくれば、その次の段階として考慮できる可能性は残っている。現段階では、10年に 1 名程度の合格者がいるということに価値を見いだしたい。

6. 3 年次における TOEIC 受験との相関

2001年度より実施してきた TOEIC IP テストに対しては、年を追うごとに全学生の認識が高まってきた。これは、学年全体に TOEIC IP テストを義務づけている 3 年次学生以外の受験者の数の増加からも伺うことができる。表14. に示すとおりである。

表14. 3 年次以外の TOEIC IP テスト受験者数の推移

年 度	2001	2002	2003
受験希望者数	11	36	65

TOEIC IP テスト受験の中心となるのは 3 年次学生であるが、それ以外の学生でも希望すれば受験を認めている。表14. をみると、実施初年度に当たる 2001年度の 3 年次以外の学生の IP テスト受験者は 10名ほどであったが、年を追うごとに数が増え、

⁴ 記録のある 1990年以降、秋田高専における英検 2 級受験者は、2000年以前では、1999年34名、1992年32名、1990年30名の順に多く、他は20人台前半、10人台となっている。この時期には、英検への取り組み自体、活発でなかったようだ。

⁵ この合格者はマレーシアからの留学生であったため、本来の英語教育の成果としては評価を同一視すべきではない。

2003年度においては65名にまで増加した。このことは、学生の中に TOEIC に対する認識が高まったことを表していると思われる。

2001年度から、3年次の英語において TOEIC 対策の授業を行い、毎年2月に TOEIC IP テストを実施している。3年次の英語の授業時数は週4時間(1授業時間は50分)で、このうち TOEIC リスニング対策に週2時間、リーディング対策に週2時間の授業時間を割り当てている。

2003年度における3学年4学科の TOEIC IP テストのクラス平均点は、表15. のようになった。

表15. 2003年度3学年の TOEIC IP テストのクラス平均点

学科名	Listening	Reading	total
機械工学科	167.9	95.9	263.8
電気工学科	193.4	126.3	319.7
物質工学科	215.3	123.9	339.6
環境都市工学科	152.3	102.9	255.2

この学年では、電気工学科と物質工学科の2クラスで TOEIC IP テストのクラス平均が300点を超え、機械工学科、環境都市工学科のクラス平均が250点程度にとどまる結果となった。これには、2年次修了までの英検準2級のクラス別取得率との相関がみられる。

表16. 2003年度3学年の英検準2級取得率と TOEIC IP テスト

学科名	英検準2級合格率(%)	TOEIC IP(点)
機械工学科	39.5	263.8
電気工学科	68.9	319.7
物質工学科	69.1	339.6
環境都市工学科	46.7	255.2

表16. は、2003年度3年次の学生が、前年度(2年次修了時)までに英検準2級に合格した学生のクラス別の割合を示している。例えば電気工学科と物質工学科は、英検準2級取得率が2学科ともほぼ同じ割合で約70%になっているが、それとは対照的に機械工学科、環境都市工学科の2学科の英検準2級取得率は50%を切る状況である。つまり、2年次修了までの各クラスにおける英検準2級の取得率の差が、そのまま TOEIC IP テストのクラス平均点の差になっている。

表17. では、2002年度3年次の英検準2級合格率と TOEIC IP テストクラス平均点を示す。

表17. 2002年度3年次の英検準2級取得率と TOEIC IP テスト

学科名	英検準2級合格率(%)	TOEIC IP(点)
機械工学科	61.3	343
電気工学科	88.6	338
物質工学科	57.5	298
環境都市工学科	75.0	322

表16. と表17. を合わせてみると、2年次修了時までに英検準2級に合格した学生のクラスの割合が60%以上であると、次年度の TOEIC IP テストのクラス平均点が300点を超えるという傾向があるといえる。

菅原 (forthcoming) の指摘のとおり、リスニングに重点を置いたプログラムは TOEIC 対策に有効であり、3年次において、英語の授業で TOEIC にどのように取り組んだかによって TOEIC IP テストの結果に影響は出るものの、上でみたデータは、学生の TOEIC のスコアを上げるためには、学生の英語力として最低英検準2級レベルが必要であることを示している。

最後に、英検2級取得者と準2級取得者との TOEIC IP テスト平均点の差について、次の表18. を用いて述べる。

表18. 英検2級/準2級取得者の TOEIC IP テスト平均点

2002年度	Listening	Reading	total
2 級	285	215	500
準2 級	189	132	321
2003年度			
2 級	304.3	215.7	520.0
準2 級	197.3	122.1	319.4

この表を見ると、英検2級取得者の TOEIC IP テスト平均点は500点程度であり、準2級取得者の TOEIC IP テスト平均点の320点とは約200点の差が出ている。このデータから、TOEIC IP テストにおける成績上位者と、英検2級取得者との間に深い相関関係が見られ、さらに TOEIC で500点以上のスコアを取るためには、英検2級以上の実力が必要であることがわかる。

7. おわりに

以上、秋田高専における英検対策について、重点化した2001年度以降の実績について報告した。学年、級に関して、全般的にいえることは、重点化導入前の2000年度以前に比べて、受験者数、合格者数とも

に格段に増加し、英語教育の充実化には十分な効果を上げたということである。

各級ごとに推移、現状についてまとめると次のようになる。

1. 3級

常に80%~90%台の取得率を保ってきたものの、2001年度から2003年度にかけては徐々に取得率が下がってきた。学生の中には複数回受験しても合格できない者、「不合格C」で判定される者が目立ち、今後にわたってこのような基礎力不足の学生に対する対応を考えなければならない。2004年度の途中までの実績を観察すると、前年の2003年度より全体的に不合格率が下がり、また、「不合格C」も出していないことから、1年次学生の学力低下に歯止めがかかったとみてよい。2004年度の最終的な結果が待たれる。

2. 準2級

2001年度から2003年度までの3ヶ年では取得率は70.4%から35%へと急激に落ち込んだ。これは、学生の全般的な学力の低下とも連関している向きもあり、根本原因について対策を考えるべきである。一方、1年次修了までの取得率は約10%をほぼ維持しており、全体的な学力低下の傾向に反し、1年次修了時点での成績上位者の英語力はかなりの水準があることを示している。また、2年次までに取得できなかった学生に対しても追跡的に取得を促し、2003年度4年次学生では、年度終了時点で約90%の取得率となった。3年次に行う TOEIC IP テストへの準備、また、進学・就職へ向けての2級、準1級取得を目指すためにも、3年次以降の準2級取得が全学生に達成されるよう、今後も指導していくべきである。

3. 2級

重点化の2001年度以降、受験者・合格者ともに増加した。特に、2001年度に2年次学生として準2級対策の授業を受けた最初の世代である学年の学生が、進級後も継続的に英検受験に意欲を見せているのは画期的である。高専卒業後の

進学、就職を考慮しても、今後も合格者増加の傾向が継続されるよう指導していきたい。また、1、2年生の低学年の中に、受験者が増加し、合格者も毎年出現するなど、喜ばしい結果が出てきているが、この傾向を今後も維持していかなければならない。

4. 準1級

現状では、1年に実質1名程度の受験者を出している程度で、合格者は数年に1名出るかどうかという現状である。高度な英語力が要求されるため、取得に関しては積極的に教育に盛り込むことができないが、2級への対応が充実してくれば、将来的に対策に取り組むことができるかも知れない。

また、英検の取得状況と TOEIC IP テストの間には有意な関連が見られる。TOEIC IP テストと英検準2級の取得に関しては、2年次修了までに英検準2級に合格した学生のクラス内での割合が60%以上であると、次年度の TOEIC IP テストのクラス平均点が300点を超えるという傾向がある。さらに、TOEIC IP テストにおける成績上位者と、英検2級取得者との間にも深い相関関係が見られ、TOEIC で500点以上のスコアを取るためには、英検2級以上の実力が必要であるといえる。

参考文献

- 小嶋英夫・小林貢・金子淳・菅原隆行・桑本裕二『実践的英語コミュニケーション能力の育成を目的とする秋田高専英語教育改善プロジェクト』平成13年度高等専門学校教育改善充実プロジェクト実施報告書、秋田工業高等専門学校人文科学系英語科、(2002)
- 菅原隆行「低学年における英語の基礎力と TOEIC の成績の関連性」『全国高等専門学校英語教育学会研究論集』24号、(forthcoming)
- 鳥飼玖美子『TOEFL・TOEIC と日本人の英語力』講談社現代新書、(2002)